

English Garden 第99話

"Go down an'tell 'em... Maybe they'll know then."

John Steinbeck

"Two are better than one."

John Steinbeck(The Bible)

「ひとりよりもふたりがよい」

ジョン・スタインベック(聖書の言葉)

ジョン・スタインベックの『怒りのぶどう』の4回目です。

ウイドパッチ国営キャンプでの生活は快適ではありましたが、仕事がないのは相変わらずでした。それに、警察の目がいつも光っていました。大会社や大きな農場主に味方する警察は、住民の望みが高くなるのを恐れて、事あれば取り潰そうとしていたのです。

ジョード一家はひと月ほどでまた仕事探しの旅に出ました。ピクスリーに近いファーバー農場で桃摘みの仕事があると聞いて行ってみると、農場の入り口の道路の脇で大勢の人が拳骨を振り回して騒いでおり、一家の車は州警察に警護される形で農場に入りました。

桃は疵がつきやすいので収穫が難しく、家族総出で一日働いてやっと20箱、1箱5セントでわずか1ドルにしかなりません。しかも、その賃金も不安定な上に、このキャンプ地にある食料品店の品物は、町よりはるかに高価なのです。



トムは昼間の騒ぎが気になったので、夜になって農場の外に出てみると、元説教師のジム・ケーシーに出会いました。ケーシーは釈放後この農場に働きに来ていましたが、1箱5セントの約束だった賃金を半分にされたことに抗議して警官に追い出されたのです。賃金の切り下げを防ぐためここでストライキの指導をしていたのでした。ストに失敗すれば賃金は確実に下げられると諭されたものの、ようやく仕事にありついたトムは戸惑います。

そこに自警団の一行がやってきて、ケーシーを見るとツルハシで殴りかかりました。ケーシーは「きみたちは自分のしていることがわからないのだ」といいながら絶命します。トムは相手の棍棒を奪って殴りつけますが、自分も顔を殴られて鼻がつぶれ、やっとのことで逃れました。トムが殴った相手も死んだため、翌日の夜、一家はひそかにファーバー農場を出ます。途中で聞いた話から、賃金は2セント半に下げられたことがわかりました。

しばらく北へ行くと綿摘みの仕事が見つかりました。近くに有蓋貨車のキャンプがあり、一台をウェンライト家と分け合って住むことになりました。トムは毛布一枚を持って藪の中に身をかくし、傷が治るまで母親のマーに食べ物を届けてもらうことにしました。綿摘みの仕事はみんなで一日働くと3ドル半になり、どうやら一息つけそうです。

しかし、妹のルーシーがふとしたことからトムのことを友だちにしゃべってしまいます。マーはその晩トムに行方をくらすようすすめ、ようやくためた7ドルを辞退するトムに無理に握らせました。そして二人は暗闇の中でしみじみと話し合います。

トムはケーシーの志を継いで、「自分たちの土地で自分たちのもののために働くことができるよう、飢えた者たちと共に戦いたい」と決意を語ります。それを察した母が「おまえのことはどうすればわかるだろう」と尋ねると、トムはケーシーが話したことを思い出しながら「人間には自分の魂というものではなく、誰もが大きな魂のほんのひとかけらを持っているだけだ...だから、おれは母さんが目を向けるところにはどこにでもいる」と答えます。いまトムは表題の聖句(旧約聖書コヘレトの言葉(伝道の書)4章9節)を引いてケーシーが語った言葉「ひとりよりもふたりがよい。みんなの魂が一緒になって初めて完全な魂となり、力を持つようになる。」の意味がわかるようになりました。それまでトムは、人に迷惑をかけさえしなければいいと考えて生きてきたのですが、暗闇の中で真剣に自分と向き合ううちに、もっと広い世界に目が開かれたのです。(次回に続く)